

# 「愛」についてのジャック・ラカンの 二つの定型表現

番 場 寛

## 序

ラカン理論の魅力の一つに、逆説的な表現がある。「人間の欲望は〈他者〉の欲望である」「女というものは存在しない」「性関係はない」のように、常識的には完全に矛盾する断言でありながら、それを精緻な論理の展開の中で示されるだけにその意味を知りたいと思わせる。多くの場合、それらの断言の理由について、ラカン自身は述べることなく、繰り返されるためその言表の真意を知りたいという欲望は高められる。

そうした謎の言い回しのうちに、「愛」を巡る言表が二つある。一つは「愛とは、持っていないものを与えることである」と、直接「愛」という言葉を明言しているものであり、他の一つは「私は、私があなたに贈るものを拒絶してくれるようあなたに頼む。なぜならそれではないのだから」という言表である。二つともそれを使いながら、何かについて説明しているが、その二つの言表の意味そのものについては明確にしていない。本稿では、「愛」を巡るこの二つの言表をその文脈に置き直して考察し、ラカンの「愛」の理論に迫りたい。

## 1. 『セミネール第8巻 転移』

ラカンが愛について本格的に論じたのは『セミネール第8巻 転移』<sup>1)</sup>である。これは臨床における「転移」と「愛」の問題を多くの文学作品（プラトンの『饗宴』、P. クローデルの『クフォンテーヌ3部作』、等）を例に挙げて論じ

## 2 (番場)

たものである。

当セミネールの冒頭で、ラカンが過去に自ら「愛」について語った二つのことを確認している。その一つは「愛」は「滑稽なもの」であるということであり、もう一つは「愛とは、持っていないものを与えることである」といった定義である。「愛」というものを「愛する者 (amant)」と「愛される者 (aimé)」とのカップルで成り立つということを確認した後、「愛する者」は「欲望の主体」であり、「愛される者」というのは「何かを持っていなければならない唯一の者」と定義している。その場合の問題は、「愛される者が持っているものは他者、つまり欲望の主体が欠如しているものと関係があるかどうか知ることだ」と説明する<sup>2)</sup>。

ここまでは、「欠如」としての「欲望」と「愛」とを同じに見る視点は自然に理解できるのだが、分からないのはすでに『セミネール第5巻』で何度か定義されていた「愛とは、持っていないものを与えることである (L'amour, c'est donner ce qu'on n'a pas)」である。この「持っていない」の主語は、愛の対象である相手ではなく、愛している主体であるから常識とはかけ離れている。

実際『セミネール第8巻』では以下のように更に明確に定義されている。

愛とは、それについて私は常に言ってきましたが、私たちはすべての仔細なことによって引き起こされているのを再発見しますが、持っていないものを与えることなのです。——そして人はもし、かりに持っていたとしても、みずから持っていない者となることによってのみ愛することができるのです。返答としての愛は非—所有の領域を含んでいるのです。

それを考え出したのは、私ではありません。プラトンなのです。——「貧困 (Pénia)」だけが「エロス (l'Amour)」を妊娠することができ、祭りのある晩、はらまさせられようという考えを思いつくことができるということを、プラトンは考え出しました。そして確かに持っているものを与えること、それは祭りであり、愛ではありません。

そこから——私はみなさんをすこし速く導きますが、みなさんは、私たちは難局を

うまく切り抜けるということが分かるでしょうが、——豊かな人にとって——それは存在しますが、そしてそのことを考えますが——愛することは常に拒絶することを引き起こすということが導かれます<sup>3)</sup>。(下線論者)

この部分において「貧困」という神から「エロス (愛、恋)」が生まれたことを寓話として捉え、「愛」は「欠如」している主体からしか生まれえないということをラカンが主張しているのである。ここで、より明確になっているのは、「愛とは、持っていないものを与えることである」という定義は、何らかの行為で「愛」を表そうとしたときに、それは「与える」という行為になり、その対象は自分の「持っていないもの」つまり「非-所有」の対象だということである。またこれに続く部分を読んでもその理由は説明されていないのだが、ここですでに「愛することは常に拒絶することを引き起こす」と明言されていることに留意したい。これはのちに考察するもう一つの言表を考えるとときに関連してくるからである。

ラカン理論を読む多くの者はこのラカンの逆説的な「愛」の定義を読み解こうと試みている。マリサ・フュマノ (Marisa Fiumanò) は、実際に会ったある若い女性の例を紹介している。その女性は仕事を探すためにイタリアのミラノに移民として移り住んで銀行員として働いていたのだが、自分の客のうちの一人のクレジットカードを使って金を引き出してしまったのである。ただその女性の言うには、それで引き出したお金は彼女自身のためのものではなく、彼女自身は一ユーロも取らず、それは彼女の恋人が電話をチャージするために使ったというのである。そのときその女性はフュマノに「私は彼に私が持っていなかったものをあげたかったのです」と言ったのであり、これに関してフュマノは彼女がラカンを読んでいなかったと確信している<sup>4)</sup>。

確かに彼女は、自分が一度として所有することなく、ある金額を自分の愛する男性にあげた。それはフュマノの説明するように「欠如」をあげたと言うこともできよう。しかしこの説明はラカンの問題の言表を十分に説明する

#### 4 (番場)

ものだろうか？ もう一度ラカン自身が「愛」について本格的に論じている『饗宴』の問題となっている場面の考察に戻ろう。ところで、プラトンの『饗宴』のソクラテスとアルキビアデスの関係については、『精神分析のための決定的な諸問題』と題されたセミネールの1965年3月17日のセミネールにおいても以下のように論じている。

愛とはそれを望まない誰かに、持っていないものを与えることなのです。アルキビアデスは自分の持っていないもの、すなわちソクラテスが彼に要求する愛であり、彼を彼自身の神秘に差し向けそして、アルキビアデスの対話においてここにおける私たちの考察にとって非常に現実的であると思われるやり方で、信じられないほど表現されています。と言いますのは、瞳のそこに現れるのはこの小さなイメージであるからであり、そのヴィジョンにおいてヴィジョンでなく、目の内部にあるものはこの何かにおいてであり、プラトンのテキストにおいてアルキビアデスが差し向けられるのは、私たちがまなざしがそうであるこの柔らかな対象を位置づけるこの場においてであるからです。そしてソクラテスがそれを望まないこと、それもまた本質的だがとどめることが要求される分節です。なぜ彼はそれを望まないのでしょうか？ というのは、とにかくめいめいが、ソクラテスは単にアルキビアデスに執着しているが、嫉妬を抱くまでだということが分かっているからです。われわれにそのことを言っているのはテキストと伝統です。

そしてソクラテスがアルキビアデスに送り返したのも、それもまた彼が持っていないと断言したものです。というのは、彼は万人が近づけるようないかなる学も持っていないからです。そして彼が知っている唯一のことは欲望の性質であり、欲望とは欠如だということです<sup>5)</sup>。

ここにおいて初めてラカンは自らの「愛」の定義を、具体例を挙げて説明しているが、その論理も錯綜している。まずアルキビアデスの持っていないものとして「ソクラテスが彼に要求する愛」と断言しているからである。この二番目の言表にも「愛」という言葉が使われているので、そこに第一の言表を当てはめれば、「ソクラテスはアルキビアデスが持っていないものを要

求めている」ことになり、一方アルキビアデスは「ソクラテスが持っていないものを与えられている」ことになり、そのソクラテスの持っていないものは、自らが持っていないと宣言する「知」となる。つまりソクラテスは「知の欠如」をアルキビアデスに与えていることになる。

ここでも明らかだが、「愛」を「行為」で定義しようとしたとき「与える (donner)」という言葉が浮かぶし、「頼む、(要求する) (demander)」という言葉もラカンを使用している。「愛の要求」といった用語も頻繁に見られる。次に「愛」と「要求」との関係を考察してみよう。

## 2. 「肉屋の妻の夢」の分析

緊密に結びついている「愛」と「与える」という問題を考えるとき、欠かせないものにラカンによって何度か論じられた「肉屋の妻の夢」という名で知られているフロイトの扱ったヒステリー患者の症例がある。その患者の見た夢は以下のようなものである。

夕ごはんにはひとをお招きしようと思ったのですが、スモーク・サーモンが少しあるだけで、他には何も買い置きがありませんでした。それで買い物に出かけようと思いましたが、今は日曜の午後だし、お店はどこも閉まっていることを思い出しました。配達してくれるところにいくつか電話をかけようと思いましたが、電話が故障中です。それで、夕ごはんにはひとをお招きしようという欲望はあきらめるしかありませんでした<sup>6)</sup>。(新宮一成訳)

この患者が「スモーク・サーモン」の夢を見たのは、彼女の友人の女性が、それが好物なのに食べるのを我慢していたことと、彼女自身もキャビアが大好きであり、それを望めば彼女の夫はくれることを分かった上で、「(私に) キャビアなんかくださらないように」と夫に頼んでいたのである。

夫がそれを与えてくれることが分かっているのに、自分の欲するものを「くださらないように」と頼むその矛盾した心理を、フロイトの分析を踏ま

## 6 (番場)

えたラカンとは、この患者は彼女と同じように、スモーク・サーモンが好きなのに、それを買ひそびれている彼女の友人の女性に同一化していると見なす。その同一化は彼女の「欲望」のあり方においてヒステリー患者の欲望のあり方を具現していると説明する。フロイトの説明では彼女はなぜそうするかというと、そうすることで「夫ともっとふざけあっていたかったから」と、理解し難い説明をするのだが、ラカンによれば、彼女は「満たされない欲望」を持ちたいと願っているのである。そのため「肉屋の妻の夢」と呼ばれる症例の女性は、夫に「私にキャビアをくださるなように」と頼むのである。つまり自分の「欲望」の消滅を可能な限り引き延ばしたいという無意識によるものだと見なされる。

このときの患者の言表にある「キャビアなんかくださらないように (keinen kaviar zu schenken)」と否定の表現で「頼む (bitten)」という動詞の二つの組み合わせが、「愛」の定義である「持っていないものを与える」と似た構造を持っているとともに、最初に問題とした言表（「私があなたに贈る物を……」）の構造との類似が見いだされる。

この、ラカン自身は「美しい肉屋の妻の夢」と呼ぶ女性については『セミネル第 22 巻 R.S.I.』でも以下のように論じている。

それはまったく私がいわゆる美しい肉屋の妻の夢において強調したことのようなものです。スモーク・サーモンを、みなさんご存じのように彼女はまさにそれを自分で取らないという条件でそれをほしがります。彼女は自分がそれを持っていない限りにおいてそれを与えます。それが愛と呼ばれるものです。それは私が愛について与えた定義でもあります。己の持っていないものを与える、それが愛です。それは女性たちの愛であり、しかし、つまりひとりずつ彼女たちは外-在している (ek-sistent) ということは本当です。彼女たちは現実的 (réelles) であり、しかも恐ろしいほどに、そうでしかないので。彼女たちは私が今しがた、言っていたこと、つまり無意識に、象徴界が外-在する限りにおいてしか存在しません。まさにそこにおいて彼女たちは症状 (symptôme) として外-在しているのであり、この無意識はその恒常性をひきお

こすのですが、このことは明らかに現実界の平面化された領域において起きていることです。(.....) それでも私が描かなくてはいけないこと、それが現実界に、しかもこの方向に現れる限りにおいて、これが症状、象徴界の効果 (l'effet du Symbolique) なのです<sup>7)</sup>。

ここで「肉屋の妻」が欲した「スモーク・サーモン」は夢の中で、それを自分で食べるためではなく、客をもてなすために欲しがるのが、夢においては少ししかなく、店に電話しようにもつながらないため、実際にはそれを客にもてなすことはできないということをこのように解釈している。

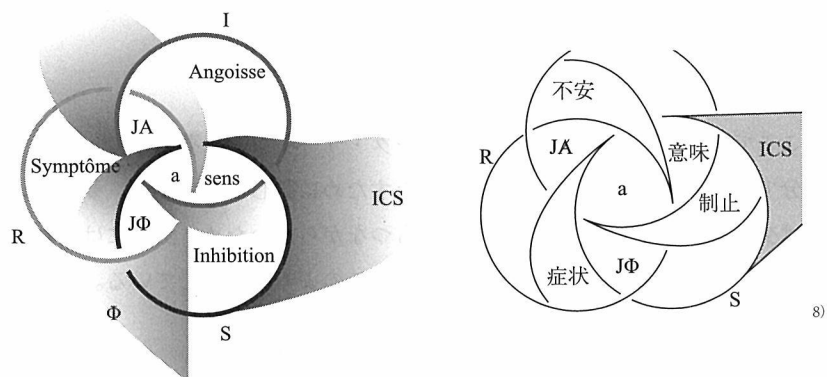
### 3. ボロメオの結び目 (Le nœd borroméen)

ここで本稿において問題となっている「愛」の問題の考察のために、「ボロメオの結び目」を使ったラカンの「愛」に関する説明を検証しよう。そのため、ラカンが1974年から1975年にかけて講じた『R.S.I.』と題されたセミナーにおいてラカンが示した図の最も完成されたものの一つを以下に示し、この引用部分で使われている概念のみを検討したい。下に引用したのは『精神分析事典』に載った同図の翻訳の部分である。

このセミナーのタイトルの『R.S.I.』とは、他の二つの領域を成り立たせている、言葉やシニフィアンで成り立つ「象徴界 (Symbolique)」と、イメージの世界である「想像界 (Imaginaire)」と、それら二つの領域を逃れるものでありながらそれら二つを成立させているものとして理論的に考えざるをえない、「構造の外部」ともみなされる「現実界 (Réel)」の頭文字を取ったものである。この「ボロメオの結び目」とは主体の精神を構造的に記述したものであり、主体はこの三つの領域が自らのうちで緊密に結びついていることで精神の平衡を保つことができる。この「ボロメオの結び目」について全面的に論じられている『R.S.I.』というセミナーはラカンがそれまで展開してきた諸概念やフロイトの概念を、まったく新たな視点から見直そうと

# 8 (番場)

して繰り広げたセミナールである。



「ボロメオの結び目」は実際は三次元的なものだが、様々な概念の関係を一望するように見せる目的に立ったとき、「平面化 (mise à plat)」という方法である角度から見た二次元化した図として表す。そのときの「恒常性 (consistence)」とは、丸い円 (輪) で表されるような一定に保たれた性質という意味であり、その円同士が交叉した内側にできる空間が「穴 (trou)」であり、それぞれの円の縁から別の円の穴に向かって張り出したように描かれているのが「外-在 (学派により ek-sistence、ex-sistence という二つの表記法に分かれている)」と呼ばれる領域である。ここに示した図では、Inhibition (制止)、Symptôme (症状)、Angoisse (不安)、のそれぞれがこの「外-在」の領域に相当する。

また JA とは「〈他者〉の享楽 (jouissance de l'Autre)」を、 $\Phi$  は「ファルス (phallus)」を、 $J\Phi$  は「ファルス享楽 (jouissance phallique)」を、ICS は「無意識 (inconscient)」を表す。

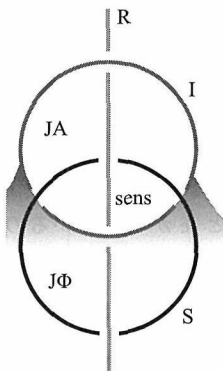
では、この「ボロメオの結び目」を用いた説明で新たに出てきた「外-在」という概念について考えてみよう。この概念を、マルセル・リテ (Marcel Ritter) は、「それは外へ、よそへ存在することである」と説明してい



る<sup>9)</sup>。ラカンとは二つの輪に対し、ボロメオの結び目を成り立たせているように交叉する第三の輪を、他の二つの輪に対し「外-在している」と定義していることをリテは指摘している。その最も分かりやすい例は、二つの輪をただ少しずらして重ね、その二つの輪の両方の穴を通るような無限直線を図で示し、その無限直線が二つの輪に対し、「外-在」していると説明している例である。その直線は無限直線であるため、それにより二つの輪は離れることなく、「ボロメオの結び目」と同じ構造ができあがるのである。

この図ではS(象徴界)とI(想像界)という二つの輪に、R(現実界)という輪の代わりの無限直線を置くと、それは抜けないので、直線の両端を曲げて輪を造った「ボロメオの結び目」と同じ効果が生まれる。つまり三つは離れることなく結びついている。無限直線は二つの輪に対して「外-在」しているのである。

「外-在」に関して、ラカンはもう一つの別の定義をしており、それは輪である「恒常性」の「周りをうろつく (tourne autour)」という説明であり、一見矛盾しているように見えるが、二つの定義は矛盾しているのではなく、「それは非-内部ではない、外である (elle est un dehors qui n'est pas un non-dedans)」という条件のもとに「恒常性 (輪)」との関係において定義されるとリテは説明する<sup>11)</sup>。つまり「ボロメオの結び目」を平面的に見ていると、輪の外とか内とかで考えてしまうが、「恒常性 (つまり輪)」とは異なった次元に存在しようとする動きの領域と捉えることができるのではないだろうか？



こうした「外-在」の概念を理解した上で、引用した「肉屋の妻の夢」についてのラカンの説明を考えると、女性たちは、象徴界から現実界の方に「外-在」している。つまり「症状 (symptôme)」として、図では「象徴界」の輪から現実界の輪の中に滲み出ているように描かれている場にいるのである。

しかし、ここにおいてはスモーク・サーモンがその対象であったが、なぜ与えたり与えなかったりするものが「愛」になるのであろうかという、最初の疑問に引き戻される。

ところで、ジャック・ラカンが1972年2月9日のセミナーにおいて、最初に紹介した奇妙な言説を披露している。それは「私はあなたが私の贈るものを拒絶してくれるよう頼む。なぜならそれではないのだから (Je te demande de refuser ce que je t'offre, parce que : c'est pas ça)」<sup>12)</sup> という言表である。

奇妙なのは以下の点である。まずこの言表の主体 (Je) は「あなた (te)」と呼んでいる親しい相手に向かって、自らが贈ったものを受け取ることを拒絶するよう頼んでいる点である。時間的なずれがあつて、いったん贈ったけれど後から考えてやはりそれは贈るにふさわしくないものだから、受け取らないでほしい。そういう意味だろうか？ しかし「私があなたに贈る」は現在形で書かれており、過去も現在も未来をも表していることを考えるとやはり矛盾と捉えるべきだろう。「贈る」という愛の気持ちから発する自らの行為を「拒絶してくれるように」と依頼するという、表面上は自己矛盾と捉えられかねない言表である。

ラカンは、この問題となっている言表の構造の不思議さを関数を用いて説明している。例えば、「私はあなたに要求する」という部分の要求する (demander) という動詞を関数  $F$  と置き、「私 (je)」と「あなたに (te)」をそれぞれ  $x$  と  $y$  と置き、 $F(x,y)$  という関数で表す。次にその要求するものとして「拒絶すること (de refuser)」という  $z$  を置き、それを更に  $x$  と  $y$  で置き換え最初の関数にあてはめ  $F(x,y,f(x,y))$  という関数で表す。ラカンは更にその「拒絶する」対象である「私があなたに贈るもの (ce que je t'offre)」を  $\varphi$  で表すが、これはすでに  $F, f$  の二文字を使っているのでそれとは違ったものだということを示すために過ぎない。この  $f$  もやはり  $je$  と  $te$  が現れているので、最初の関数に代入すると  $F(x,y,f(x,y,\varphi(x,y)))$  と表される。

ラカンは更にこれらの「要求」「拒絶」「贈与」という三つの関係を図式化しているのだが、重要なのはこれらの三つはどれも緊密に結びついていると

いうことで、それだけに最後の「それではない (c'est pas ça)」の「それ (ça)」とは何を指しているのか分からなくなると指摘する<sup>13)</sup>。

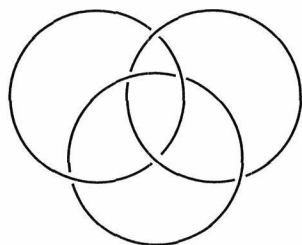
さらに、「私があなたに贈る (je t'offre)」とはどういうことかと問いを投げかけ、それはまったく「私を与える (je donne)」ではないことを強調する。そこで出されるのが「ポトラッチ (potlatch)」の概念である。

私が何かを贈るとき、それはあなたが私に返すという期待のうちにそうするのです。そしてまさにそのためにポトラッチは存在するのです。

ポトラッチとは溺れさせるものであり、贈与にある不可能なものはみ出すものであり、その不可能なものとは、それが贈与 (le don) であるということです<sup>14)</sup>。

さらにラカンが「私はあなたに私があなたに贈るものを拒絶するよう頼む」という言表を「結び目 (nœud)」とみなし、そこから「頼む」「拒絶する」「贈る」という三つの動詞のうち、どれを抜いても意味をなさなくなることを指摘する<sup>15)</sup>。

この1972年2月9日という日は、後期ラカン理論において重要な位置を占める「ボロメオの結び目」という概念が初めて導入されたという意味においても特別な日である。ただ、ここで導入された「ボロメオの結び目」のそれぞれの輪は、この1972年においては、すでに示したような、「現実界」「象徴界」「想像界」という意味を帯びているわけではない。



1972年2月9日の「ボロメオの結び目 (Le nœud borroméen)」<sup>16)</sup>

「頼む」「拒絶する」「贈る」という三つの動詞をそれぞれの輪とみなし、それらが離れないやり方で「結び目」を形作っていると説明している。「その二つの動詞からひとつをほどくと、私が対象 a と呼ぶこの意味の効果 (cet effet de sens) がどのようなものであるかを見つけることができるのです」と明言する<sup>17)</sup>。つまりこれらの三つの動詞は一つの

文の中で緊密に結びついて、全体として一つの意味を形成しており、どれか一つの動詞を取り去るということは、それはちょうど三つの輪の一つにはさみを入れて取り去るようなもので、三つの輪がバラバラになるように、文も全体として意味をなさなくなるということを言っている。

こうした思考を経て、ラカン自身はこの言表について以下のように説明している。

私が今日進めた要求と拒絶と贈与、それらはめいめいが他方に対してのみ、それらの意味を持つのです。しかし私がそれを解きほぐそうと試みたような、あるいはむしろその解きほぐしの証拠を取ることで、その結び目から生じることは、それは決してその二つだけに起因するのではないということです。それは対象 a がどのようなものであるかの根源なのです。

私はみなさんにその最小限の結び目をお見せしました。しかしみなさんはその別のものを付け加えることができるでしょう。「なぜならそれではないのだから」何が？「私が欲望しているものは」です。そして要求の特性とは、非常に厳密には、欲望の対象がどのようなものであるかを位置づけることができないということだということを誰が知らないでしょうか？私があなたに贈るもの、それはあなたが欲望するものではないのだが、私はあなたにそれを拒絶するよう頼むのです。私たちは「あなたが欲望するもの」によって容易にものをふさぐことができるでしょう。そしてそのとき amur の手紙は無限に広がっていくことでしょう<sup>18)</sup>。

この引用部分の最後に出てくる amur という語はラカンの新造語で「amour (愛)」と「mur (壁)」という語を合わせたものである。これについてマルセル・リテは、「amur という語は、対象 a と去勢と愛とを結びつける。それは現実界、あらゆる愛において働いている不可能なものに送り返される」と説明している<sup>19)</sup>。

この言表についての考察はおよそ一年三ヶ月後の 1973 年 5 月 15 日のセミナーにおいて以下のように深められている。

なぜ私は昔にボロメオの輪を介入させたのでしょうか？ それは次の定式を翻訳するためなのです。私はあなたに要求する——何を？——拒絶することを——何を？——私があなたにあげるものを——なぜ？——なぜならそれではないから——それ、みなさんは、それが何であるか知っています。それは対象 a なのです。対象 a はいかなる存在でもありません。それはある要求が想定する空虚のそれであり、その要求については、いかなる存在も支えないある欲望がどういうものでありうるか、私たちが想像できるのはメトニミーによって、すなわち文の最初から最後までの実証な純粋な連続性によってその要求を位置づけることによってのみなのです。その欲望は、結び目を手に入れる実体以外のいかなる実体のない欲望なのです。

この文、「私があなたにあげるものを拒絶するよう要求する」を言い表すことで、私は前回繰り返したこの「それではない」によってしか動機づけることができませんでした。

この、「それはそれではない」はあらゆる要求による欲望において、対象 a、享楽を満足させるであろう対象の嘆願しかないということを意味しているのであり、——その享楽は分析のディスクールにおいて不適切にも生殖の欲動、あるものと還元できずに〈他者〉(l'Autre)にとどまっているものとの満ちた、記述不可能な関係であるような関係がそこで記述されるような欲動と呼ばれるもののうちで想定される快の充足 *Lustbefriedigung* であるようなものなのです。私は以下のことに固執しました。要求のまったき主体であるこの私 (je) は〈他者〉ではなくて、欲望の原因という形式のもとにそれ(〈他者〉)に置き換わりにやってくるものである——私は、その形式がフロイトの発見にしたがい、吸引や排せつの対象、眼差しや声によってさまざまに構成されるかぎりにおいて四つに多様化しました。これらの対象が要請され、欲望の原因とされるのは、〈他者〉の代理物としてであります。

その主体は性関係はないということの機能において非活性化された諸対象をみずからに表象するように思われます。語る身体しかなく、それはそのようなものとしての世界についての観念をみずからに形成します。世界、知に満ちた存在の世界、それは一つの夢、身体が語る限りにおいての身体の夢でしかありません。なぜなら認識する主体しかないからです。対象 a のなかに相関物、パロールの享楽であるかぎりの享楽するパロールの相関物をみずからに与えるいくつかの主体があります。そのパロール

は数々の一なるもの (Uns) 以外の何を身動きできないようにするでしょうか？<sup>20)</sup>  
(下線論者)

#### 4. 対象 a

『セミネール第 19 巻』と同様、『セミネール第 20 巻』におけるこの引用部分において、「それではない (c'est pas ça)」の「それ (ça)」は、結局「対象 a」なのだというのがラカン自身の説明だとすると、その場合の「対象 a」とはどういうものなのかという点が問題となる。

問題の言表で「それではない」というものをラカン自らそうだと断言するのは「対象 a (objet a)」であった。そう明言することでどういうことが分かるのであろうか？「対象 a」がどういうものであるかをその理論的変遷の要の点だけをエリック・ボルジュ (Eric Porge) の説明を参照しながら辿ってみよう。

ボルジュは、ラカンは『幻想の論理 (*La logique du fantasme*)』の 1966 年 11 月 16 日のセミネールにおいて初めて「対象 a」を発明したと指摘し、『大文字の他者から小文字の他者へ (*D'un Autre à l'autre*)』の 1968 年 11 月 27 日のセミネールにおいて「対象 a は分析的語らい (*discours analytique*) の効果であり、そのようなものとして私がそれについて言ったことはその効果そのものでしかないのです」と言っていることが指摘されている。そしてボルジュによれば、ラカンは 1972 年に「私がある日、対象 a を発明したのは、それが『悲哀とメランコリー』に書かれていたからである」と回顧している<sup>21)</sup>。

更にボルジュは、ラカンにおいては「小文字の a」で表されていた概念、対象が以下のような変遷を経て「対象 a」と変化していったことを説明している。

文字の a は、最初は想像的な他者と鏡像の対象である。それが価値を変えて、反対に「欲望の対象」、次に「欲望における対象」そして次に「欲望の原因対象」と呼ば

れる。反対に非鏡像的な対象のひとつの範疇を指し示すのは『欲望とその解釈 (*Le désir et son interprétation*)』(1958-1959) からであり、そして実際には「欲望のグラフ」によってのみに過ぎない。不確定なある時期の後、ラカンが対象 a の形式を乳房、糞便、まなざし、声という四つに限定した<sup>22)</sup>。

またボルジュは、先ほど検討したプラトンの『饗宴』におけるソクラテスが持っていると思なされた「アガルマ (agalma)」が「対象 a」であることも指摘している<sup>23)</sup>。

われわれが普通「欲望」というとき、「……を欲望する」という表現をとることから分かるが、何か具体的な対象を考えていることが分かる。しかしその対象は手に入れたとたん、あらたな対象を求めるようになる。従って「欲望の対象」とは何か「具体的なものや人」として姿を現すけれど、それが本当の対象ではなく、その根底にあり、人に「欲望を起こさせる力」を持ったものを考え、それをラカンは「欲望の原因対象 (l'objet, cause du désir)」として、「対象 a」と名づけたのである。

しかしラカン理論において理解し難いのは、この「対象 a」をあるときは、数学の黄金数に相当するものであるというように抽象化され、論理的な形式の中に組み込まれるものと説明していながら、それが身体に現れる形式としては、「乳房、糞便、まなざし、声」という四つの対象を具体的に考えていた点である。

さらに『セミネール第 16 巻 大文字の他者から小文字の他者へ』においては、この対象 a を、上に引用したように、「分析のディスクリールの効果」と指摘し、別の箇所では「剰余享楽 (le plus-de-jouir)」と抽象化した定義をしている点も理解し難い。

筆者はすでに別の論文<sup>24)</sup>で論じたが、この「剰余享楽」をラカン自身はマルクスの「剰余価値 (la plus value)」と同じものであるとしか説明していない。しかしこの引用部分で下線を引いた部分が「対象 a」にあたり、ここにおいては初期の「対象 a」の概念と隔たっていないように思える。

では、ここで検討した、『セミネール第19巻』、『セミネール第20巻』、『セミネール第22巻』、に使われている「ボロメオの結び目」の中では「対象 a」はどのように描かれているかもう一度見てみよう。三次元である筈の「ボロメオの結び目」を二次元化することで「対象 a」は三つの輪に挟まれる中心の位置に置かれる。三つの輪をそれぞれ外側に向かって動かしていくことで「無 (rien)」にまで至るほどその中心の穴を狭めることができるのだが、普通はこの場には、ある「対象」が来るとマルク・ダルモン (Marc Darmon) は指摘する<sup>25)</sup>。

## 5. 「贈与」「提供」「要求」

いままで「愛」を巡るラカンの二つの言表について論じてきたが、まさに『愛の現実界－ラカンの三つのモデル』<sup>26)</sup> というタイトルのもとに、589 頁にもなる大部な博士論文を書いたダヴィッド・モニエ (David Monnier) もこの二つの言表を「愛」の概念のもとにラカンの文体にも似た難解な文体で説明している。彼はまず二つの言表に出てくる「提供 (l'offre)」と「贈与 (le don)」を対比して論じている。

彼によれば「提供」は、「要求と贈与の中間にあり」、「提供」は「要求を要求すること (une demande de demande)」なのである。それは他人に交換の行動を始めるよう要求することであり、無の贈与 (un don de rien) とも言い換えることができる。「贈与」は、他人に対し、事前の了解を得ることなく、それを受け入れるようせき立てる点で「提供」とは異なっている。モニエが「提供は他者の拒絶を先取りしている要求 (une demande) である。それはある者の贈与の空虚に (au vide) 目覚めることで時間的な論理に戻る。この分節はその人に、行為とその人の関係における愛との相関的な一つの場を授けるのである」と断言している通り、「提供」とは相手が受け取ることを拒絶する可能性を前提としているのである<sup>27)</sup>。

一方、「愛とは、持っていないものを与えることである」といった言表で鍵となる「贈与 (le don)」については、以下のように論じている。



未来のものとして前提された要求 (une demande) のない贈与 (le don) はない。ある要求を伴わないような、もろもろの条件に従わないような無償の贈与はない。愛の提供の体制はそれを据え、それを捨てようと試みる。人が持っていないものの贈与は、贈与の登録簿には属していないもので評価されるのである。それは交換から排除されたもの、シニフィアン領域をのがれたものに送り返される。(.....) 人が持っていないものの贈与は、人がそうではなくて、他人が持っているものを通じて人がそうであるものを実現する一つのやり方である。(.....) それは、ファルスの機能を生じさせ、それを送り返すような現実の場を他人に与えることである。それは、人がファルスとして持っていないものをよりよくつかむために、対象aとしてあるものを与えることである。<sup>28)</sup> (下線論者)

つまり、本来「贈与」というものに、「要求」のない「無償」のものはないのであるが、もし「持っていないもの」を「贈与」としたら、それはもう普通の意味の「贈与」とは呼べないものであり、「交換」から逃れるばかりではなく、ある象徴的な意味を担うようなシニフィアンでも表せないものである。それは、相手に「対象a」を与えることで、結果として自らのうちに「ファルス」を持つようにすることであるというのがモニエの主張である。

「対象a」とは何よりも「欲望の原因対象」であり、それにより主体のうちに欲望が生み出されるその原因となる対象としてラカンが理論的に設定したものであったことを思い出そう。ファルスとはラカンにより「欲望のシニフィアン」として定義されていた。モニエのように断言できるかは分からないし、なによりもラカンが「ボロメオの結び目」の中心に置いたaが、モニエがここで説明する「対象a」と一致するかは明確でない。

### 結論、あるいはO. ヘンリ著『賢者の贈りもの』<sup>29)</sup>

「愛」を巡る「贈与」「提供」「要求」の問題を考察してきたわけだが、問題となった二つの言表だけではなく、それに対するラカン自身の説明もそれ

らを辿っていくといくつか矛盾と思わざるをえない箇所も発見できた。「愛」という「感情」を、それを向けられる対象に伝えようとするときに起こる「行為」としては、「提供」なり「贈与」というもののしか人は行うことができないということを、言葉で極限にまで表した表現であった。この二つの言表は、結局は何かモノではその感情は伝えることはできないということを思い知らされる挫折の告白のように思えてくる。

このようにラカンの考察を辿っていくと O. ヘンリの小説『賢者の贈りもの』がラカンの結論をアナロジーとして明白に説明しているように思える。この小説の貧しい夫婦は互いにクリスマスの贈り物をしようと望んだとき、相手が一番大切にしていると思われるものに関係した品物を贈ろうと考える。妻は夫が大切にしている懐中時計につける「鎖」を贈ろうと思い、夫は妻の魅力的な髪につける「櫛」を贈ろうと思いつく。だが両者とも自分が贈ろうと望む品物を買うだけのお金がない。そのため自分の大切にしていた物（妻は自分の髪を、夫は懐中時計を）を二人とも売って、そのお金でそれらの贈り物を買う。クリスマスにお互いに品物を交換したとき、自分の贈るものが相手にとって役に立たないものになっていることに初めて気づく。

言い換えれば、妻が夫にあげるものは、自分のすでに持っていない物としての「欠如した髪」の代わりの「鎖」であり、夫が妻に贈る物は、「すでに持っていない物」としての自分の大切にしている「懐中時計」であると見なすこともできよう。時間的な経過の後であるが、つまり二人ともすでに「自分の持っていない物」を与えているという言い方もできるであろう。

この小説をラカンの用語に翻訳したらどうなるであろう？ 先に紹介したモニエがどちらの意味で「ファルス」という用語を用いているか不明であるが、夫は「去勢」の印としての「象徴的ファルス (phallus symbolique)」、それは、自分は母親の「想像的ファルス (phallus imaginaire)」でもなければ、それを持ってもいないということを思い知らされるという挫折の経験を乗り越えて獲得できたものであるが、それを妻に与えるのである。つまりモニエ流に言うなら、「去勢の果実 (le fruit de la castration)」をあげるのである。それが大

切にしていた「懐中時計」の「欠如」としての「櫛」で表されていたとしたらどうだろう。

他方、妻は、何をあげたことになるのだろうか。妻は切った自らの髪の「欠如」としての「時計の鎖」を伴って、自分を「対象 a」の位置に置くことで、夫にファルスを得させることになったと言えるであろうか？

では、二人とも相手に自分の「持っていない物」の代わりとして品物を渡すとき、二人はラカンの提示した謎の言表のように、相手に対し、心の奥底ではその相手がその贈り物を拒絶することを頼んでいたのであろうか？ 小説を素直に読めばそのようにはならないであろう。しかし、「あなたに本当に贈りたいのはそれではないのだ」という沈黙の叫びも聞くことができよう。それはすでにここで検証してきたように、「愛」を表すときのどうしようもなさ、不可能性は真実だからである。

## 註

- 1) Jacques Lacan, *LE SÉMINAIRE livre VIII Le transfert*, Seuil, 2001.
- 2) *Ibid.*, p. 47.
- 3) *Ibid.*, p. 419. なお、プラトンの『饗宴』については朴一功訳『饗宴／パイドン』、京都大学学術出版会、2007 年を参照した。
- 4) Marisa Fiumanò, *La amour c'est donner ce qu'on n'a pas*, 11/02/2005. [http://www.freud-lacan.com/articles/article.php?id\\_article=00829](http://www.freud-lacan.com/articles/article.php?id_article=00829)
- 5) Jacques Lacan, *PROBLÈMES CRUCIAUX POUR LA PSYCHANALYSE Séminaire 1964–1965*, Éditions de l'Association Freudienne Internationale Publication hors commerce, 2000. p. 224.
- 6) Sigmund Freud, *Die Traumdeutung*, in *Gesammelte Werke II/III*, S. Fischer, 1942. p. 152. 『フロイト全集 4』岩波書店、2007 年、196 頁。
- 7) Jacques Lacan, *R.S.I. Séminaire 1974–1975*, Éditions de l'Association Freudienne Internationale, publication hors commerce, 2002. p. 114.
- 8) 図は「国際ラカン協会 (l'Association lacanienne internationale) のホームページ [http://www.freud-lacan.com/#dos\\_2](http://www.freud-lacan.com/#dos_2) より引用。翻訳の図は新宮一成他訳『新版 精神分析事典』弘文堂、2002 年。468 頁。
- 9) Marcel Ritter, *L'INCOSCIENT NODAL (I)*, in Jean-Pierre Dreyfuss, Jean-Marie Jardin, Marcel Ritter, *Écriture de l'inconscient De la letter à la Topologie*, ARCANES, 2001. p. 279.
- 10) Jacques Lacan, *R.S.I. Séminaire 1974–1975*, Éditions de l'Association Freudienne

- Internationale, publication hors commerce, 2002. p. 30.
- 11) Marcelle Ritter, *op.cit.*, p. 279.
  - 12) Jacques Lacan, *LE SÉMINAIRE livre XIX ...ou pire*, Seuil, 2011. p.82. ただし、ここでは、導入部にあった「je te demande de me refuser…」の me が消えている。
  - 13) *Ibid.*, p. 88-89.
  - 14) *Ibid.*, p. 90.
  - 15) *Ibid.*, p. 90.
  - 16) *Ibid.*, p. 91.
  - 17) *Ibid.*, p. 90.
  - 18) Jacques Lacan, *LE SÉMINAIRE livre XIX ...ou pire*, Seuil, 2011. p. 92.
  - 19) Marcel Ritter, ...le rapport ne s'écrit pas, in Jean-Marie Jardin et Marcel Ritter, *La jouissance au fil de l'enseignement de Lacan*, érès, 2009. p. 342.
  - 20) Jaques Lacan, *LE SÉMINAIRE livre XX Encore*, Seuil, 1975. p. 114.
  - 21) Eric Porge, *JACQUES LACAN, UN PSYCHANALYSTE PARCOURS D'UN ENSEIGNEMENT*, érès, 2000. p. 173.
  - 22) *Ibid.*, p. 174.
  - 23) *Ibid.*, p. 184.
  - 24) 番場寛、「ラカンにおけるマルクスの遺産」、『西洋文学研究 第26号』、大谷大学西洋文学研究会、2006年。
  - 25) 「国際ラカン協会」の2012年夏のセミナーの導入として8月29日に行われた講演。同協会のホームページで公開されている。Introduction du Séminaire d'été 2012 par Marc Darmon, [http://www.freud-lacan.com/Champs\\_specialises/Billets\\_actualites/Introduction\\_du\\_Seminaire\\_d\\_ete\\_2012\\_par\\_Marc\\_Darmon](http://www.freud-lacan.com/Champs_specialises/Billets_actualites/Introduction_du_Seminaire_d_ete_2012_par_Marc_Darmon)
  - 26) David Monnier, *Le réel de l'amour Trois modèles lacaniens*, Presses Universitaires de Rennes, 2011.
  - 27) *Ibid.*, p. 69.
  - 28) *Ibid.*, p. 70.
  - 29) O. ヘンリ作、大久保康雄訳「賢者の贈りもの」、『O. ヘンリ短編集 (二)』、新潮社、1969.

(本学教授 フランス語・フランス文学)